

< 論 文 >

看護学生と他学科学生の乳幼児に対するイメージの比較

市川 正人, 細野 恵子, 上野 美代子

A comparison between nursing and non-nursing students with regard to their image of infants.

Masato ICHIKAWA, Keiko HOSONO, Miyoko UENO

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

The purpose of this study is to compare the image of infants held by nursing students to that of students in other courses of study at Nayoro City University. A total of 200 first year students, consisting of 54 Nursing, 40 Nutrition, 52 Social Welfare, and 54 Early Childhood Education students, participated in the study, which was conducted from the end of April through the beginning of May, 2008. Using the 51 pairs of adjective opposites developed by Inoue et al (1985) for measuring subjects' views of children, participants responded to each adjective pair on a 7-point semantic differential rating scale. Each item was scaled so that a higher score represented a more positive image. The Kruskal-Wallis H-test ($p < .05$) was used to analyze the variance between the 4 groups of students, and then the Mann-Whitney U-test ($p < .0125$) was applied to the 22 items found to be significantly different. Results showed that Nursing students scored significantly higher than Nutrition students on 5 items. There was no significant difference found, however, when compared with Social Welfare students, but when compared with Early Childhood Education students, Nursing students scored significantly lower on 3 items.

【目的】看護学生と他学科学生の乳幼児に対するイメージの比較をすること。【対象】本学1年生200名を対象とした。内訳は看護学生54名、栄養学科学生40名、社会福祉学科学生52名及び児童学科学生54名である。【調査期間】2008年4月下旬～5月初旬。【調査方法】質問項目は井上ら(1985)が子ども観の測定に有効であるとした51組の形容詞対を用い、7段階の評価尺度を設け得点化した。いずれの項目も、得点の高い方が肯定的なイメージとしている。【分析】学科間の比較にはKruskal-WallisのH検定を行い、有意差($p < .05$)の見られた22項目に対しMann-WhitneyのU検定を用いた($p < .0125$)。【結果】看護学生は栄養学科学生に対しては5項目において得点が有意に高かった。一方、社会福祉学科学生に対しては有意差がみられなかった。また、児童学科学生に対しては3項目において得点が有意に低かった。

キーワード：看護学生、乳幼児のイメージ、他学科との比較

I. 緒言

小児看護を学ぶ学生にとって、小児をいかに理解するかは極めて重要と考える。子どもに対するイメージは過去の体験や成育過程の影響を受け、子どもへの接し方や問題解決への取り組み方に影響するといわれている¹⁾。しかし近年、核家族化や少産・少子傾向の進行に伴い、一般に学生が子どもと触れ合う機会が減少している。そのため、学生のもつ乳幼児に対するイメージが乏しいのではないかと一般に言われている。こうした中、看護学科においては、病気や障害のために支援を必

要としている人々の援助を行う、看護職を目指している学生が多いことから、養護を必要とする乳幼児に対しても肯定的なイメージをもつ学生が多いと推測される。

看護学生の乳幼児に対するイメージの調査は、実習や講義前後でのイメージの変化に関する研究^{1)~3)}が数多く報告されている他、過去の体験と乳幼児のイメージとの関連を調査した研究^{4),5)}が報告されている。しかし、看護学生と他学科学生との間で、乳幼児に対するイメージの比較を行った研究は非常に少なく^{6),7)}、また4年制大学における学科間の比較は報告されていない。

看護学生の乳幼児に対するイメージを把握することは、より効果的な小児看護の講義・演習・実習を展開するにあたり有益な情報と成り得る。そのためには、専門的な教育を受ける以前の段階での乳幼児に対するイメージを把握することが重要である。そこで本研究では、入学後間もない看護学生と他学科学生を対象とし、乳幼児に対するイメージの比較をすることで、看護学生の乳幼児に対するイメージの相対的特徴を把握することが有意義であると考えた。

II. 研究目的

本研究の目的は、これから本格的に看護学を学ぶ看護学生の1年生と、その対照群として同時期の他学科学生の乳幼児に対するイメージの比較をすることにより、看護学生の乳幼児に対するイメージの相対的特徴を把握し、小児看護領域における効果的な教育を展開するための基礎資料とすることである。

III. 研究方法

1. 研究対象

対象は2008年4月に本学に入学した大学及び短期大学1年生で、看護学生54名、栄養学科学生40名、社会福祉学科学生52名及び児童学科学生54名の計200名である。

2. 調査方法

調査は各学科の特徴的な講義がさほど進んでいない時期とするため、2008年4月下旬～5月初旬に行った。調査は質問紙法にて行い、その場で回収とした。

3. 質問項目

質問項目は井上ら⁸⁾が子ども観の測定に有効であるとした51組の形容詞対を用い、それぞれの項目に対し7段階の評価尺度を設け、その値を得点とした。各項目共に「明るいー暗い」など肯定的イメージと否定的イメージの組み合わせによる形容詞対となっている。いずれの項目も、7点が最も肯定的なイメージ、1点が最も否定的なイメージとし、その中間の得点を4点とした。

4. 分析方法

1) 各学科の回答の傾向

各学科の回答の傾向を把握するため、得られた回答は各学科別に集計し、質問項目ごとに平均値を算出した。またそれぞれの質問項目ごとに得られた平均値を、中間得点の4点を基準に「4点以上の項目」および「4点未満の項目」に分類し、全51項目中の割合を求めた。

2) 看護学科と他の学科の比較

看護学科と他の学科との比較には、Kruskal-WallisのH検定を用いて4学科間の比較を行い、有意水準5%で有意差の見られた項目に対しMann-WhitneyのU検定を用い、ボンフェローニ法にて多重比較を行った($p < .0125$)。なお分析にはSPSS 16.0J for Windowsを使用した。

5. 倫理的配慮

研究対象者には研究の趣旨を口頭および文書にて説明し、同意の得られた学生のみ回答を依頼した。研究協力への同意の確認は、質問紙の提出をもって同意があったとみなした。質問紙は無記名で、研究対象者個人が識別されないよう、連結不可能匿名化とした。また、本研究の実施に当たっては、研究者の所属する大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

IV. 結果

1. 回答数および回収率

回答数は看護学生54名、栄養学科学生40名、社会福祉学科学生52名、児童学科学生54名の計200で、いずれも回収率は100%であった。また各学科の有効回答数および有効回答率は看護学科54名(100%)、栄養学科39名(97.5%)、社会福祉学科51名(98.1%)、児童学科53名(98.1%)であった。

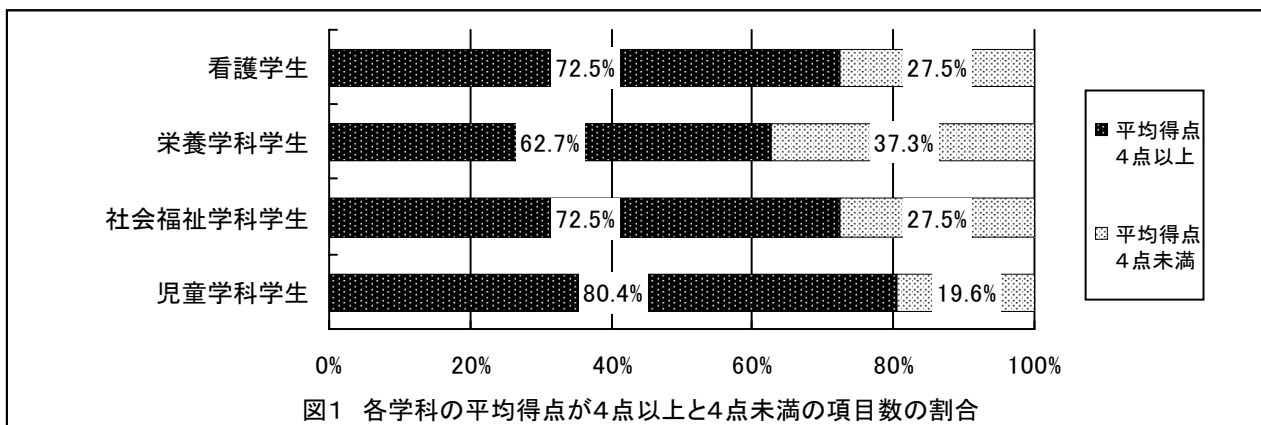
2. 各学科の回答の傾向

1) 全項目の平均得点

全項目の平均得点は、看護学生4.9、栄養学科学生4.5、社会福祉学科学生4.7、児童学科学生5.0であった。

2) 各項目の平均得点

各項目の平均得点は図2の示すとおりである。全51項目中、平均得点が4点以上の項目数は、看護学生37項目(72.5%)、栄養学科学生32項目(62.7%)、社会福祉学科学生37項目(72.5%)、児童学科学生41項目(80.4%)であった。また、全51項目中、平均得点が4点未満の項目数は、看護学生14項目(27.5%)、栄養学科学生19項目(37.3%)、社会福祉学科学生14項目(27.5%)、児童学科学生10項目(19.6%)であった。(図1)



3. 看護学生と他学科学生との比較

1) 各学科の得点傾向に有意差のみられた項目

Kruskal-WallisのH検定を用いて4学科間の中央値の比較をした結果、「静かなーうるさい」、「好きなー嫌いな」など、22項目において得点傾向の有意差がみられた(表1、図2)。

表1 Kruskal-WallisのH検定により4学科間に有意差のみられた形容詞対

静かなーうるさい**	たくましいー弱い*	やさしいーこわい*
好きなー嫌いな**	まじめなーふまじめな*	かわいらしいーにくたらしい**
良いー悪い**	安定したー不安定な*	優しいー厳しい**
親切なー不親切な*	きれいなーきたない**	生き生きしたー生気のない**
気持ちのよいー気持ちの悪い**	きちんとしたーだらしない**	清潔なー不潔な*
頼もしいー頼りない*	責任感のあるー無責任な**	まとまったーバラバラな**
思いやりのあるーわがままな**	落ち着いたー落ち着きのない**	優れているー劣っている**
理性的なー感情的な*		

* : p<.05、** : p<.01

2) 看護学生と他学科それぞれの学生との間で得点傾向に有意差のみられた項目

上記Kruskal-WallisのH検定にて有意差のみられた22項目について、看護学生と栄養学科学生、社会福祉学科学生、児童学科学生それぞれにMann-WhitneyのU検定を用いて多重比較を行った結果、

以下の項目に有意差がみられた。

(1)看護学生と栄養学科学生との比較

看護学生は栄養学科学生に対し、「良い—悪い」など5項目において有意に得点が高い傾向がみられた(表2)。

表2 看護学生と栄養学科学生の回答に有意差のみられた形容詞対

良い—悪い	きれいな—きたない	かわいらしい—にくたらしい
優れている—劣っている	生き生きした—生氣のない	
p<.0125		

(2)看護学生と社会福祉学科学生との比較

看護学生は社会福祉学科学生に対し、いずれの項目においても有意差は見られなかった。

(3)看護学生と児童学科学生との比較

看護学生は児童学科学生に対し、「静かな—うるさい」など3項目において有意に得点が低い傾向がみられた。(表3)

表3 看護学生と児童学科学生の回答に有意差のみられた形容詞対

静かな—うるさい	好きな—嫌いな	きちんとした—だらしない
p<.0125		

V. 考察

看護学生の平均得点は、51項目中37項目(72.5%)において4点以上であり、乳幼児に対し肯定的イメージを持っている学生が多い傾向がみられた。しかし一方で、否定的なイメージを持つ項目も14項目(27.5%)あり、必ずしも乳幼児に対し肯定的イメージのみではないことが分かった。

他学科学生との得点傾向の比較においては、看護学生は栄養学科学生に対し、51項目中5項目で得点が有意に高い傾向が示された。看護学生の多くが目指している看護職には、支援を必要とする人々への援助を行うという役割がある。よって看護学生は、乳幼児に対しても養護すべき対象と捉え、肯定的イメージを抱いていることが推測される。

社会福祉学科学生に対しては、得点傾向に有意な差は見られなかった。社会福祉学科学生も、ノーマライゼーションの理念から乳幼児に対しても肯定的イメージをもっていることが推測され、看護学生と社会福祉学科学生との間においては、乳幼児に対するイメージは、ほぼ同様であることが示唆された。

一方、児童学科学生との比較においては、51項目中3項目において看護学科の得点が有意に低い傾向が見られた。木村⁷⁾の調査では、2年課程の看護学生と保育専攻の短大生との比較において、看護学生は保育専攻の学生に比べ子どもを「嫌い」と答えた学生が多かったと報告している。児童学科は保育士・幼稚園教諭を育成する学科であり、児童学科学生は入学時より乳幼児に対する興味・関心が高く、乳幼児に対し肯定的イメージをもつ学生が多いことが考えられる。そのため、本研究においても児童学科は看護学科を上回る得点になったと推測される。

以上のことより、「看護学生は乳幼児に対し肯定的イメージをもっている」という我々の予想は、多くの項目で平均得点が4点以上の「肯定的イメージ」として捉えているという結果により裏付けられた。また、他学科学生との比較においては、保育士・幼稚園教諭を目指す児童学科学生には及ばないものの、比較的得点が高い傾向にあることが分かった。

緒言でも述べたとおり、子どもに対するイメージは過去の体験や成育過程の影響を受け、子どもへの接し方や問題解決への取り組み方に影響するといわれているが、我々はこれら入学前の過程を知り得る事は出来てもそこに介入することは出来ないと考え、本研究の調査項目とはしていない。

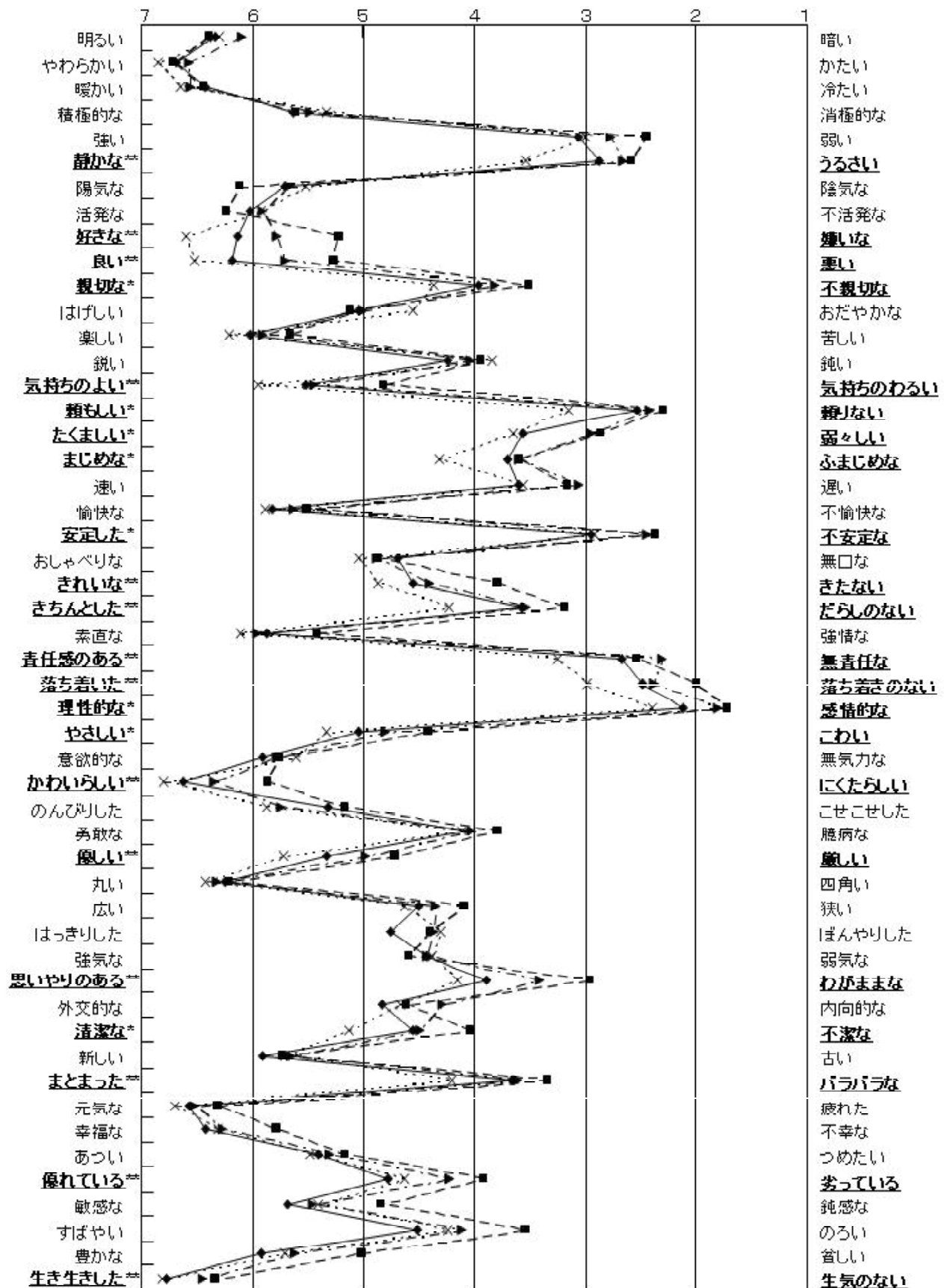
一方、入学後に行う小児看護実習に対して、実習前に乳幼児に対し否定的なイメージをもっていた看護学生が、実習後に肯定的イメージに変化した例が報告されている⁹⁾。日常生活の中で乳幼児と触れ合う機会の少ない学生にとっても、小児看護実習は乳幼児の理解を広げる好機となりうる。本研究で対象とした入学後間もない看護学生も、今後小児看護を専門的に学び、臨地実習にて乳幼児とかかわる過程において、個々の学生の乳幼児に対するイメージが再構築されることが予想される。今後は、本研究の結果をふまえて、効果的な小児看護の講義・演習・実習を検討すると共に、専門的な講義や演習・実習が進むにつれて、乳幼児に対するイメージがどのように変化していくのか、引き続き調査していく必要がある。

VI. 結論

本研究において、入学後間もない看護学生の多くは、乳幼児に対し肯定的イメージをもっていることが分かった。また看護学生と他学科学生との得点傾向の比較では、児童学科学生に対しては乳幼児に対する肯定的イメージの得点が低い傾向が見られたが、社会福祉学科学生と同程度、栄養学科学生に対しては多くの項目において、看護学生が乳幼児に対し肯定的なイメージを持っていることが分かった。

引用文献

- 1) 市江和子；小児看護学において看護学生が子どもに対してもつイメージの変化—小児看護学学習の前後におけるイメージ形成要因—, 第28回日本看護学会集録(看護教育), 140-142(1997)
- 2) 今辻由香里, 山下千波, 中嶋恵美子；3年過程看護学生の小児看護学講義終了後の学び, 第36回日本看護学会集録(小児看護), 321-323(1997)
- 3) 草野美根子, 寺田敦子, 今福ひとみ, 福池ゆかり, 杉本暁子, 大久保薫, 酒見敬子, 中淑子, 内海滉；小児看護実習における看護学生の子どもに対するイメージの変容—病棟実習と保育所実習の因子分析的検討—, 第28回日本看護学会集録(看護教育), 143-145(1997)
- 4) 高橋紀子, 内海滉；看護学生の子ども時代の自己像と看護学生の子どもに対するイメージとの関連, 日本看護研究学会雑誌, 22(3), 204(1999)
- 5) 野村幸子, 河上智香, 長谷典子, 藤原千恵子；子どもとの接触体験からみた看護学生の子どものイメージ, 県立広島大学保健福祉学部誌, 7(1), 169-180(2007)
- 6) 市江和子；看護学生の子どもに対するイメージに関する研究(その1)—看護学生と保育学生の比較—, 日本看護研究学会雑誌, 24(3), 391(2001)
- 7) 木村留美子；子ども観の研究(1)—SD法による短期大学生の子どものイメージについて—, 日本看護科学会誌, 12(1), 50-56(1992)
- 8) 井上正明, 小林利宣；評価技法としてのSD法の意義とその使い方(その2)—形容詞対の尺度構成の方法—, 指導と評価, 31(10), 41-44(1985)
- 9) 細野恵子, 上野美代子；小児看護実習後の看護学生の乳幼児に対するイメージ, 市立名寄短期大学紀要, 41, 25-31(2008)



※下線の項目はKruskal-WallisのH検定にて有意差の見られた項目を示す。
(*: p<.05, **: p<.01)

—●— 看護学生、—■— 栄養学科学生、—★— 社会福祉学科学生、—×— 児童学科学生

図2 各学科における各形容詞対の平均得点